

いかなる社会においても生きていける子どもたちに —自己有用感の向上と主体性の育成につながる 小学校教育の在り方—

高松市立屋島小学校
教諭 上川 亜夕

1 はじめに

4年前の本校赴任当時、自信のない子ども、何事にも消極的な子どもが多く、自分たちの力で自分たちの学校生活をよりよくしようという姿勢があまり見られなかった。また、香川県学習状況調査の結果からも、自尊感情の低さ、学習に対する関心・意欲の低さ、そして、課題解決に取り組む意欲の低さなどが課題であることが分かった。特に、「自分にはよいところがある」という自尊感情に関する項目については、平成29年度の調査結果では、県平均と比べると-7.6%であった。私は、この自尊感情の低さの改善こそが、自尊感情と密接に関連する自己有用感、すなわち、「役に立てた。」「認められた。」という、他者との関係で自己を肯定できる感情の向上につながり、ひいては、他の課題の改善や主体性の育成にも結び付くと考え、様々な実践を試みた。

2 実践の内容・方法

全ての指導の基本となる、子どもたちと教師との相互理解と信頼関係構築のため、学級では、定期的、かつ、要望に応じて随時対応する個人面談を実施し、全校的には、学級や学年を越えて、子どもたちへの日常的な声かけに努めている。

面談には、子ども自身も気が付いていなかった潜在能力を発見し、引き出し、そして伸ばさせ、自信につなぐことができるという効果があり、面談を通して子どもたちの気持ちを後押しすることで、新しいこと、困難なことなどにチャレンジしてみようという積極性も生み出すことができている。また、面談は、一人一人が抱える問題等を把握しやすく、個に応じた対応も可能であることから、友達関係の問題解決や、問題行動の未然防止にも大いに役立っており、その有用性を強く実感している。

面談については、当初、何を話していいのかわからないという子どもたちなりの戸惑いがあったが、繰り返していくうちに、自分で面談ノートを作成し、話したいこと、相談したいことなどを用意してくる子どもも出てくるようになった。

面談では、相談や悩みへの答えを私が出すことではなく、たとえ時間がかかっても、子ども自身に考えさせること、そして、子ども自身が答えを出せるよう共に考えることを基本姿勢としている。「自分で考え、自分なりの答えを出す。出せる。」という自信をもたせることも面談の主な目的の一つである。私としては、子どもたちが適切な答えを見付けられるための的確なアドバイスを与えられるよう心がけている。

子どもたちの自己有用感の向上と主体性を育むことにつながったと考えられる、面談を基盤として展開された活動例を紹介する。

(1) 自己表現の場づくり「Show & Tell」

「Show & Tell」は、人前で話せないと思い込んでいる子や、話すことに消極的な子に、話す機会を与えたいとの思いからの活動である。興味のあることや、得意なことについて

て、その対象物を示しながら3分間で発表するという取組であり、話すことへの自信を付けさせることをねらいとしている。当初は、子ども自身が希望する身近な題材からスタートし、徐々に学習や将来の夢に関することなどをテーマとして与えた結果、回数を重ねるごとに、内容にも深まりが感じられるようになってきた。人前で話すことの楽しさを初めて感じた自分に驚く子どもも見られた。

この取組では、1人1台配布されているタブレットが、説明内容の組立てを検討する際や、発表のツールとして有効活用されていることで、論理的思考の伸長も図られており、各教科での学びの深まりにもつながっている。また、この実践を経験した子どもたちが、後述の「やしまっ子スマイル会議」や、ボランティア活動などの中心的役割を果たすことで、前向きな姿勢を全校生にも広げている。さらに、この取組は、好きな本について、その内容を要約して説明する「読書リレー」という形にも発展しており、発表の順番待ちができるほどのうれしい状況になっている。「Show & Tell」は、子どもたちが主体的に行動できるきっかけになったと実感できた活動例である。

卒業生からは、「この活動で自信が付き、前向きになれた。」、「この経験は宝物だ、後輩たちにもぜひ経験させたい。」との声上がり、保護者からも、「全く勉強しなかった子が自分から机に向かうようになった。」、「学校関連の前向きな会話が増えた。」、「近所の人に積極的にあいさつをするようになった。」などの、子どものうれしい変容に驚く声も聞かれた。もちろん、プラスへの変容が、全てこの実践の効果であるとは言えないが、子どもたちの主体性の育みにとって、よい影響を与えていることは間違いなく強く感じている。

(2) 学びをつなげることの大切さ

学校づくりに主体的に関わらせるため、年度当初に、学級や児童会の子どもたちに年間行事を提示し、年間を通しての目標を考えさせた。子どもたちは、自分たちで目標を設定し、実行したことにより、「修学旅行で経験したあのことが、運動会や広島平和学習に応用できる。」というように、各行事で学んだことをつなげて考えることができるようになってきている。行事の後には、経験や学びをその後に生かすため、子どもたちとの振り返りのミーティングを必ず行い、学んだことを新たな学びにつなげて考える大切さを意識させている。

(3) 楽しく充実した学校づくりをめざす「やしまっ子スマイル会議」

一昨年度から始まったこの会議は、学校をよりよくするための集会で、児童会が主催する全校生参加型の会議である。第1回では、全校生が取り組む三つの目標「やしまっ子スマイル宣言」を決定した。コロナ禍で途切れるかもしれないと危惧された第2回も、事前にアンケートを実施し、全教室を ZOOM でつなぐことで会議を開くことができ、それまでの1年間の成果や課題、そして、次年度に向けての課題改善の具体的な方策について活発な話し合いが行われた。前年度の目標の一つである「全校生に優しくしよう」という項目についての反省点として、「知らない人に声をかける勇気がない。」という意見が多数あったことから、新たに「全校生の誕生日をお祝いしよう」という取組が生まれた。これは、誕生日にリボンを付けているだけで、多くの子どもたちや教職員からおめでとうの声をかけられ、誰もがその日には主役になれる活動で、子ども自身も、祝ってもらったうれしさで、想像以上に自己の存在価値を認識できており、そのうれしさが、誰かを祝ってあげたいという気持ちを生んでいる。誰にも訪れる誕生日を、全校生が自然な形で楽しく祝い合うことで、子どもたちの自尊感情の高まりも見られ、前年度の課題も改善されつつある。2年連続して会議を開いたことで、子どもたちの学校づくりへの意識が高まり、全校生で学校をよりよくしたいという思いも強まっており、「みんなの

前で発言できた。」「自分の意見が役に立った。」「認められた。」という感情が子どもたちに芽生えることで、自己有用感を向上させる結果にもなっている。

また、この会議での経験が、様々なボランティア活動への、多数の子どもたちの参加にもつながった。「誕生日委員会」には60人の、地域の人に感謝の気持ちを伝える「感謝の集い」には100人の、子どもたちがゼロから考え、実行した文化祭「オータムフェスティバル」には150人もの子どもたちが集まった。主体性とは遠い存在であると思われがちな1年生までもが、この会議を経験したことで、2年生になった現在では、ボランティア清掃や校内放送に率先して取り組んでいる。一人一人に役割を与えて責任をもたせることが、子どもたちの自己有用感を高め、さらには、新たな活動への意欲へと結び付いている。

「やしまっ子スマイル会議」の開催に当たっては、会議の運営を最初から最後まで子どもたちに任せて、教師は途中で口を挟まないということに留意した。教師の助けで会議がうまく運んでも、それは、子どもたちの真の成功体験にはならないと思われ、仮に、つまずきがあったとしても、「なぜうまくいかなかったのか。」「どうすればよかったのか。」「次回はどうすべきか。」などについて、子どもたち自身が反省し、次に生かそうと考えることの方が、より子どもたちの力になると考えたからである。成功体験から学ぶことは多いが、失敗から学ぶことも同様に多いという思いをもとにした指導が、失敗やつまずきを恐れずにチャレンジしていこうという、子どもたちの積極的な気持ちにつながっていくと信じている。

もちろん、事前準備の段階では、例えば、子どもたちが作成した議事進行方法や、進行役の発言内容などについてのアドバイスを与えるなどして十分なサポートに努めた。また、第1回では、初めて全校生が一堂に会する会議であったことから、学年ごとに座らせたのでは、1年生からは意見が出にくいのではないかと考え、1・6年生、2・4年生、3・5年生をペアにして座らせ、上級生が下級生の発言を助けられるような座席位置の工夫もした。結果として、6年生のサポートもあって、1年生からも想像以上の手が挙がり、1年生としての多くの意見が出され、この一点をとらえても、全校会議開催の意義は十分にあったと考えている。

「やしまっ子スマイル会議」を実効性のあるものとするための工夫もある。「なんでもボックス」と「お助けボックス」、そして、学校新聞「屋島っ子タイムズ」の活用である。「こんなことをしたい。」「こんなアイデアがある。」と思った時にいつでも提案できる「なんでもボックス」。そして、「こんなことで困っているので助けてください。」という声に応える「お助けボックス」。検討を要する意見や声等については、提案者、児童会及び担当教師で打合せを行い、応えるべき声や実行可能な提案等を、「屋島っ子タイムズ」で全校生に周知するという形をとっている。

日常的に自分たちの学校に関心をもたせ、一人一人が学校全体の動きを意識することに役立っており、ここでの提案や意見などから、会議の議題も自ずと浮かび上がってきているとも考えられる。

さらには、子どもたちの希望もあって、第1回のこの会議を機に、それまでは4年生以上が参加していた代表委員会に、全学年から参加することにもなった。6年という長い時間を過ごす自分たちの学校の行事や活動に、子どもたち全員が主体的な意識をもって取り組める環境がまた一つ整った。1・2年生は、まずは、参加することで、自分たちが学校全体に関わっているという感覚だけでも身に付けてもらえれば、必ず、主体性の大切さを意識できる将来につながっていくのではないかと期待できる。

3 実践の成果

子どもたちのがんばりと教職員協働の結果、学習状況調査の結果においても、徐々に数値の向上が見られるようになってきた。「自分にはよいところがある」と答えた子どもが着実に増えてきている。様々な実践を通して子どもたちが感じた達成感や充実感、自己有用感が数値向上の要因となったのではないかと分析できる。コロナ禍においても、「だからできない。」ではなく、「この状況下でできることは何か。」を子どもたちと話し合っただけで実行できたことは、実践のテーマである「いかなる社会においても生きていける子どもたちに」という目的にかなった非常に意義のあることだったと考えている。

香川県学習状況調査（質問紙）の県平均との比較	H30 (%)	R1 (%)	R2 (%)
自分にはよいところがあると思いますか	-6.4	1.1	2.3
授業は楽しいと思いますか	-2.3	-3.8	7.0
学級の友達と話し合う活動を通じて、考えを広げたり、深めたりすることができていますか	-6.7	-2.0	1.1
学校に行くのは楽しいと思いますか	-2.0	0.3	2.2

4 普及させたい取組と期待される効果

「Show & Tell」は、人前で自分の思いを発表できるようになるための素地づくりとして、非常に有用な取組であり、それも、「やらされた。」ではなく、「自分の力でできた。」という満足感を与えられる効果的な実践である。特に、話すことを苦手としている子どもにとっては、自分の得意分野を発表できたことや、他者から認められたことで、自分でも驚くほどの自信が生まれ、自尊感情や自己有用感をより高める結果となっている。1年生からでも実践可能な取組であり、この実践の積み重ねによって、様々な面での子どもたちの意欲や積極性を高めることが期待でき、他者の発表に耳を傾け、理解しようとする姿勢が、良好な人間関係を形成することにもつながっていくと考えられる。

5 課題及び今後の取組の方向

子どもたちの自己有用感の向上と主体性の育成にとって重要なことは、教師としての私自身の知識やスキルだけではなく、子どもたち一人一人と真摯に向き合うこと、そして、日常的に子どもたちの言動を細かくケアし、サポートする姿勢が必要であると感じている。その意味では、毎日こそが実践の場だと認識しているので、自分で考え、自分で答えを出し、自分で行動し、そして、自分の言葉と行動に責任をもてる、そんなたくましい子どもたちに成長してもらうための指導を日々心がけたいと考えている。様々な実践によって高まりつつある学びへの意欲を継続、発展させるため、これからも同様の姿勢をもって、日々の学校生活や授業の在り方、そして学校はどうあるべきかをさらに研究していきたい。もちろん、そこには、家庭生活も大きく影響してくるので、保護者との情報の共有及び連携の在り方も視野に入れて検討する必要があると考えている。小学校だけで完結する教育ではなく、大人に成長していく過程で必要な考え方を、そして、主体性や社会性の基礎能力をバランスよく身に付けさせることを目標として、教育活動を展開していきたい。